

## 閉会挨拶

菅野 晴夫 (公益財団法人 がん研究会 顧問)

あっという間に時間が経ってしましまして、大変残念でございますが、もう閉会の辞ということになってしまいました。今日は、まずはご出席を頂きまして、そして最後までここにご参加頂きまして、心から御礼を申し上げます。それから座長の先生方、演者の先生方、本当にありがとうございました。おそらく先生方はもっとお話をされたいと思われたり、あるいはもっと他の先生方にご質問をなさりたいと思われたことも多々あったと思うのですが、今日は最初の設立の記念シンポジウムということで、時間も足りなくなりましたが、また次回を期したいと思うのであります。

最初の文部科学副大臣のお話しは格調高く、日本の現状を非常によくサマライズして頂いて、日本の果たすべき役割を話して頂きました。私どもも目から鱗が落ちるといった感じを持ったわけでありまして。

杉村先生は環境発がんについて全体のお話をして頂きましたが、先生ご自身はそのリーダーであられます。世界の化学発がん及び環境発がんを作られた先達でもあり、そして現在に至っておられる先生が、非常に広い学問的お立場からお話しを頂きまして、誠にありがとうございました。

その後、五人の先生方はそれぞれの各論とでも言うべきものをお話し頂きまして、大変有意義であったと思います。

この「次世代」という言葉は問題でありまして、私は、おそらく樋野先生が「次世代」と名付けられたのには甚だ深い意味があるのではないかと考えております。今日のご演者の中でも「次世代」についてそれぞれの立場でお話しを頂きました。杉村先生も「私どもの世代」、「次の世代」、という形でありました。私としましては、この「次世代」には三つぐらいの内容があるのか、という感じがしております。

その第一は、今日のお話を聞かれてもお分かりかと思いますが、研究者はそれぞれ一生懸命やっているのですけれども、その間の関連は、必ずしもないのです。学問というのは細分化しますので、しょうがないところでして、これが進歩というものではありませんけれども、それでは済まない世の中になっている、というようなことが第一点としてあるのではないか。これからは、環境発がんを研究している先生方が、お互いにもう少し広い立場で、そして総合的に考えるということが必要ではないか、と思うのです。先日樋野会長が病理学会総会をなされて、その時のテーマが「広々とした病理学」というのであります。樋野先生は「広々とした」というのが好きでありまして、私も好きであります。従ってこれからは「広々とした環境発がん」というようなことも頭に入れて頂いて、ご自分のところだけではなく他の人のところの環境発がんのこともよく考えておいて頂く、というのがいいのではないかと思います。

それから二番目ですけれども、以前は、環境発がんというのは専門家だけのものだったのです。でも、そうではない世の中になってまいりました。社会とか行政とか、いろいろな人々が絡んでいます。今日ご出席の

方々も、そういう一般の方も多いのではないかと思います。そういう、専門家と一般の方や社会とが、対話をしながら議論を深めていくというのが、これから非常に重要なことではないかと思うのです。ことに環境発がんというのは、漠然としたたくさんの物質に、我々は常に暴露していることを扱う領域でもありますから、そういう意味で、社会との繋がり、というよりも「社会との緊密な cooperation」が重要ではないかと考えております。

三番目は「日本の貢献」ということであります。日本の学問は日本の国内だけの問題ではなくて、国外、即ちアジアや諸外国といった、世界を含めた立場の学問にしないといけないと思いますし、そしてまた、そこで貢献できる余地が充分にあるのではないのでしょうか。幸いにこの環境発がんには非常によいリーダーがおられますので、いい仕事がたくさんありまして、体制もかなり整っているのです。ですからこれを十分に生かしてダイナミックにやってくれば、この会は将来ますますいいのではないかと思ったのであります。この三点は私の個人的な感想でございますが、おそらくご出席の皆様にもそれぞれのご意見がおりだと思えますので、考えを深めて頂ければ有難いと思います。

最後になりましたが、たくさんの団体のご後援を頂戴致しありがとうございました。特に、免疫生物研究所の清藤さんには多大の協賛を頂きまして、ありがとうございました。そして最後になりますけれども、総会司会の森まどかさんには大変ありがとうございました。(拍手)

これで終わらせて頂きます。ありがとうございました。